

家まで、幅広い層の読者にとって有益な書である。

*本書ではマルフーザートの分類に関しては詳説されておらず、Ernst, C. W., *Eternal Garden: Mysticism, History, and Politics at a South Asian Sufi Center*, State University of New York Press, 1992: 62-83等を参照する必要がある。

(二)宮文子 京都大学大学院文学研究科博士後期課程

浅野和生著

『イスタンブールの大聖堂』

—モザイク画が語るビザンティン帝国—

わが国におけるビザンツ美術研究の第一世代を辻佐保子氏や辻茂史氏とするなら、本書の著者である浅野氏は第二世代のビザンツ美術史家ということになる。ビザンツ、ビザンティンという語の相違に顕著に表れているように、わが国におけるビザンツ研究は歴史研究と美術史研究の二つの異なる伝統のもとに育まれてきた。一般に、問題意識や方法論の点で、歴史学と美術史

には大きな溝があると想像されがちであるが、欧米のビザンツ研究を見た場合、両者の距離はそれほど隔たつてはいない。前世紀においても、イギリスのビザンツ史家シリル・マンゴーを筆頭に、名だたるビザンティニストらはジャンルの垣根を越え、優れた研究成果を生み出しているのである。そういつた近年の学際的なビザンツ学の成果が存分に活用された本書は、新書という体裁をとつてはいるが、狭い意味での美術史の啓蒙書にとどまるものではない。浅野氏は、五世紀に創建されたビザンツの象徴ともいえるべき巨大建築物「聖ソフィア大聖堂」と、そこに描かれた数々のモザイク画を主役に据え、その歴史、美術・建築史的問題を平易な文章と豊富な図版で解き明かしていく。

本書の顕著な特徴は、美術や建築を徹底して歴史的コンテクストの中で理解しようとする姿勢である。絵画や建築技法とその変遷に関する叙述は、美術史家の手によるものとしては驚くほど少なく、それに代わって同時代の政治・社会情勢の説明に紙幅が多く割かれている。

イスタンブールに残るビザンツ美術の観

光案内とでもいえるべきプロローグに続いて、第一章では、ユスティニアヌス帝治世初期に生じ、大聖堂を火災に巻き込んだ「ニカの乱」の様子がプロコピオスの引用とともに鮮やかに語られている。ユスティニアヌスによる聖堂再建事業に焦点を当てた第二章では、聖堂の建築史的独創性が、イサウリア人建築家たちが帝国各地で活躍した六世紀の状況と関連付けて説明される。

二世紀に及んだ聖像論争が聖堂に及ぼした影響に触れた第三章を経て、本書の枢要ともいえるべき第四章では、論争の終結後に作成されたモザイク画の作者、作成年代、作成意図が丹念に検討される。モザイク画の多くは皇帝や皇后の姿を描いているため、筆者は妥当な解答を求め、同時代の帝国政治史の森に果敢に踏み込んでいく。ビザンツ末期と帝国滅亡後の聖堂の運命を扱った第五、六章では、わが国ではあまり知られていないロシア人巡礼者やトルコ人歴史家の記述が紹介され、聖堂の内部景観や、聖堂を巡る政治状況が多面的に再構成されており、非常に興味深い。

一般に、歴史研究者は、何かしらの構造や事件、人物といったものから歴史を読み

解こうとしがちで、「場」や「もの」に目を向けることは少ない。しかし、ピエール・ノラの『歴史の場』を持ち出すまでもなく、時に特定の「場」や「もの」は高度な理念性、象徴性を帯び、日常生活の深層にまで根をおろす。そして、いうなれば、それらは徹頭徹尾、歴史的存在なのである。明確に意図されていたかはわからないが、「場」としての聖ソフィア大聖堂と「もの」としてのモザイク画の過去・現在について書かれた本著は、ビザンツ文化の表象と記憶に関する優れた手引書と言えよう。

最後に、いくつか気になった点に触れておきたい。まず、聖堂内のモザイク画を検討する第四章で取り上げられている諸学説はいささか古いのではないだろうか。欧米における近年のビザンツ美術史の議論は、事実特定型のものではなく、美術作品の表象としての機能や形態をめぐって展開されているように思える。そういった現在進行形の美術史研究で、聖堂のモザイク画がどのように分析されているのか気になるところではある。また、本文中で多くの史料や先行研究が言及されるにもかかわらず、注がないためにその出典を確認することが困

難であった。新書という性格上やむをえなかったのかもしれないが、多少配慮していただきたかった。

それから、近年、尚樹啓太郎氏によって大々的に問題とされたビザンツ期ギリシア語の日本語表記について、著者は古典語読みと現代語読みの折衷表記を採用しているようだが、本文中では「テオフィロス」、「セオフィロス」(綴りは同じ Θεοφίλος)のように表記揺れが見えられた。表記に関する注がないため、こうした表記揺れが単なる間違いなのか、それとも何らかの規則に基づくものなのか判然としない。

ビザンツ期のギリシア語が現代語風に発音されていたことに鑑み、現代語風表記に改めるべしという尚樹氏の主張と実践は、必ずしも研究者に好意的に迎えられたとは思えないが、ビザンツ期ギリシア語の発音の問題、ひいてはビザンツと現代ギリシアの言語・文化的連続性を研究者に意識させたという点では重要であったといえる。古典語読みの慣例がある程度尊重しながら現代語読みを取り入れた折衷表記は重要な「第三の道」たりえるだろう。いずれにせよ、一般読者の混乱を避けるためにも、研

究書や概説書を著す際には、凡例等で自らの採用する表記法を予め断っておくべきだろう。

(新書判 二〇七頁 二〇〇三年二月)

中央公論新社 七八〇円)

(橋川裕之 京都大学大学院文学研究科博士後期課程)